

理数科のアンカーたち

熊本県立荒尾高等学校

1988年(昭和63年)度に設置され、28年目を迎えた今年度、高校再編に伴って荒尾高校理数科はその歴史を閉じます。現3年生は、入学当初より理数科のアンカーとしての自覚をもって、高校生活を送っています。その成果の一つとして、第18回中国・四国・九州地区理数科高等学校



課題研究発表大会(徳島大会)において、最優秀賞を受賞しました。

この生徒たちは、入学当初より最後の理数科生(アンカーたち)であると校内的にも本人たち自身も意識していました。それは、南関高校と荒尾高校が統合されてできる岱志高校に、理数科は設置されないからです。

このアンカーたちが入学した時の3年生は、荒尾干潟がラムサール条約登録湿地になったことを機に、クラス全体で課題研究授業のテーマを「荒尾干潟の研究」とし、平成25年度第10回熊本県公立高等学校理数科研究発表会で奨励賞を受けていました。

アンカーたちが1年生として参加した第11回の同大会では、当時の2年生が「荒尾干潟をカニの口器から考える」と題して、濾過食性が干潟の底生生物の特徴であると報告して実質2位となる優秀賞を得ました。その大会帰りの列車を待っているとき、来年自分たちが発表するときは最優秀賞を取りたいと話していました。

1年次の秋より研究を行い、2年次秋に校内大会、そして県の大会と研究発表を行いました。内容は、これまでの理数科の研究を踏襲したものであると同時に、9人の生徒達が3種類の動物の生態について分担して調査研究を行った後、荒尾干潟全体の生態系について考察したものとなりました。結果は、平成27年度第12回大会の最優秀賞を得、今年7月に行われた、徳島大会でも最優秀賞を得ることができました。

ここで、発表内容の一部を紹介します。

荒尾干潟の航空写真でわかるように、ここは人の生活と近い里海です。二次的自然と言えます。発表タイトルは「荒尾干潟の底生生物(ベントス) - 住み分け、共存、共生 -」でした。

漁協沖で漁獲対象のアサリとアナジャコを人間が捨てるゴミがあり、民家に一番近い場所でトビハゼを調査しました。

海水濾過食性のアナジャコの巣穴に樹脂を流しいれて調べました。

トビハゼは高潮帯、アサリとアナジャコは中潮帯に住み分け、さらに砂泥の質の違いで住み分けていました。

中潮帯では、砂泥濾過食性、海水濾過食性、腐肉死肉食性等の食い分けと干潟表面と砂泥中の住み分けで、多種類・多個体が共存していました。

採集した共生生物は、オオシロピンノ、マゴコロガイ、クボミテッポウエビ、アナジャコウロコムシの4種でした。

住み分け、共存、共生の具体例を紹介して生態系多様性を報告し、ヒトの活動も生態系の一部であると考察しました。

有明海高校生サミット参加等、環境保全に関する情報発信や小学生の環境学習を補助する活動も併せて発表しました。

この研究の中で得たものは多く、干潟での活動をととても楽しみ、地域の自然や協力していただいた方々に感謝の心を持たれたことが良かったです。

また、荒尾干潟に住むアナジャコの成長と巣穴のタイトルで 2016 年日本ベントス学会でのポスター発表も行いました。

荒尾高校理数科は、平成 26 年に、熊本県青少年育成県民会議、青少年(団体)の部表彰を受け、今年は、肥後の水とみどりの愛護賞も受賞しました。

今、アンカーたちは自らの進路に向け受験に向き合うと同時に、岱志高校理科部へ荒尾干潟研究の引き継ぎを行っています。それは、10月に行われた第2回水の国高校生フォーラムでの岱志高校理科部の発表に受け継がれました。

